

## 「地域おこし」

四国経済連合会常任理事(株徳島銀行相談役) 岸 一郎



先日、地域活性化に関するあるセミナーで著名な講師から「場所のもつ力を信ずること」という主張を聞いた。日本の各地はその場所ごとにそれぞれ大きな力を持っており、それを全国にどうアピールするかが問題だというのである。

いわゆる地域おこしを論ずる場では識者はよく地域の「強味」を生かすことだと強調される。ごもっともな話であるが、地域は総論では動かない。

その点「場所のもつ力を信じよ」との論は、まさに的確な捉え方であり、私には新鮮な気持ちで聞くことができた。このポテンシャルな力を引き出す策が地域おこしだと確信した。

徳島県上勝町にそのモデルがある。各種のレポートで報じられているとおり、今や全国的な“先進地”となっている。山合いの僻地、過疎、高齢化等、産業立地の見地からは最悪の条件下でいずれも「場所」のもつ資源に着目し、多くの事業を成功させている。なかでも「彩」は福祉産業と呼ばれるほどに実に多方面に見事な成果をあげている。ご存じの通り葉っぱを料理のつまものとして商品化し、それを全国シェア80%という企業化に成功している。私は上勝町をたびたび訪ねているが、確かにそこには山しかない、葉っぱしかない、年寄りしかいないという印象である。そこに「強味」などに見受けられるものは何もない。

ところが情熱的なリーダーの下で葉っぱと高齢者が「力」となった。都会の食堂でつまものに関心を示す客をみて、それをヒントに故郷の葉っぱを特産品に、そしておばあちゃん達を生産者にして「彩」を立ち上げた。これまで市場開拓などご苦労もあったが今日では市況、受注、出荷等の情報を防災無線のシステムに乗せて各農家に送り、情報の共有化を図るとともに生産者間に競争意識をもたせるなど、見事な運営である。ほとんどが80歳前後のおばあちゃん達は個々の収入増はもとより“毎日仕事があり、世の中のお役に立っていることが嬉しい”と深々と生き甲斐を感じとり、過疎集落の連帯感を強めている。さらに朝早くからパソコンを駆使して市況を睨むので認知症などになる暇がないという。今、この町の老人医療費は他町村の50%という。福祉産業といわれる所以である。

地方ではご多聞にもれず過疎や高齢化を嘆き、人口減少もあってそこに将来像を描けないでいる。地域の振興において明らかに劣勢な環境の下で活性化を図るのは確かに困難である。

しかし、上勝町が示すように「強味」とは優勢で有利なものとは限らない。「場所のもつ力」をどのように引き出すかが問題である。「そこにある資源」に知恵を加え、人々の生き甲斐に結びつけてこそ真の活性化なのである。